

ふじのくに
地球環境史
ミュージアム

基本構想

平成 26 年 3 月

静 岡 県

目 次

1 趣 旨	1
2 経 緯	2
3 社会的背景	4
4 本県に求められる博物館像	5
5 新しい博物館の基本理念	6
(1) 館の名称	6
(2) 理 念	7
6 活動の基本方針	9
(1) 調査研究	9
(2) 収集保管	10
(3) 教育普及	11
(4) 展示・情報発信	12
(5) 他機関との連携の推進	13
7 管理運営	15
8 施設整備	18
9 今後のスケジュール	19

1 趣旨

日本人は、古より、富士山を霊峰すなわち信仰の対象として仰ぎ見るとともに、芸術の源泉としてきた。その富士山が、平成 25 年夏、世界文化遺産に登録されて世界の宝となり、日本は、世界から、「富士の国」として認識されるに至った。

「富士」の「富」は物の豊かさを、「土」は徳のある人格者を意味し、その字義を踏まえ、我々は物心ともに豊かで調和した国柄を目指して「富国有徳」を理念に掲げ、これを機に、富士の名に恥じることのない人づくり、地域づくりによる「富士の国づくり」を自覚的に始めることとした。

富士の国づくりは、富士山を国土の象徴として大切にし、未来に語り継ぐとともに、各地が個性を発揮し、美を重んじ、和を尊び、物心ともに豊かで品格のある地域社会をつくり、地球環境の保全の一翼を担い、世界平和への貢献を目指すことであり、まず、我々静岡県が、ポスト東京時代の国づくりの先導役を担うという気概を持って、この地に、富国有徳の理想郷を創り上げていく。

「富士」は、ひらがなで「ふじ」と書き、尽きることのない価値の源泉としての「不尽」、不老長寿のシンボルとしての「不死」、幸せでやさしい思いやりがある「福慈」、そしてオンリーワンを表す「不二」など、様々な意味を表す。私達は、静岡県を“ふじのくに”と称することとし、そうした「ふじ」が意味する多様な価値を希求し、多様な広がりをもつ“ふじのくに”になることを目指していく。

“ふじのくに”づくりには、それを基礎づける国づくりの実践の学、地域の大地に根ざした学問が必要である。我々は、地球の中での“ふじのくに”についての学問を体系的に研究し、教育活動を展開することで、地域を愛し、自然への畏敬の念を育み、地球環境の保全を担う「有徳の人づくり」を推進する。

“ふじのくに”静岡県は、日本列島に結節する3つのプレートの接点に位置し、最深部で2,500mに達する駿河湾と3,000mを超える富士山、南アルプスなど急峻な山岳地帯、幅広い気候帯に豊かな自然が広がり、多様な動植物や希少な種が生息・生育している。私達は、この郷土の固有の自然環境を、学び、親しみ、守り、育て、そして、次世代に継承していかなければならない。

また、人類の文明が地球環境に与えた影響は、現代の様々な環境問題を誘引し、生物多様性の危機に直結している。人と自然の共生を目指し、人と地球上の生態環境との関わりを歴史的に調査研究することで過去から現在を見通し、地域の未来のあり方に示唆を与えることが必要となっている。

そこで、“ふじのくに”の新しい博物館は、全国初の地球環境史の博物館として、こうした時代の要請に応えていくこととし、実践の学にふさわしい優れた研究者が集い、環有度山を中心とした高等教育機関や博物館、全国の研究者などとの連携を深め、“ふじのくに”の知の拠点の形成を目指していく。

2 経緯

(1) 県立博物館の検討（昭和 61 年度～平成 6 年度）

昭和 61 年度に調査を開始した県立博物館構想は、同年、新総合計画に「博物館構想の推進」を位置付け、各種文献調査や県内外の有識者との博物館構想懇話会を開催し、検討を進めた。

(2) 自然系博物館の検討（平成 7 年度～平成 14 年度）

平成 7 年度には、有識者等の意見を基に、博物館のテーマを、富士山、駿河湾など「自然系」と決定し、同年、総合計画・新世紀創造計画に「自然系博物館の整備」を位置付けた。

平成 7 年度から、各県の自然系博物館の現地調査をはじめ、県民の意識調査、有識者との構想意見交換会などを進めた。

平成 13、14 年度の 2 ヶ年に渡り 12 回開催された、民間有識者による「自然学習・研究機能調査検討会」（座長：山田辰美富士常葉大学助教授）では、自然環境をめぐる課題に的確に対応できる人づくりや、その基礎となる自然に関する調査・研究の推進の必要性が指摘され、拠点施設のあり方や整備形態、整備方法などが検討された。

平成 14 年度には、同検討会により、自然史資料の収集保管や調査研究を優先整備する二段階整備案が提案された。

(3) 自然学習資料センターの設置・移転（平成 15 年度～平成 24 年度）

平成 15 年度から、自然史資料の収集保管業務を開始し、同年発足した NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークに業務を委託した。

資料の収集保管業務の実施と保管場所として、同年 9 月から平成 17 年 6 月まで教育委員会三島分館に、平成 17 年 7 月からは、旧中部健康福祉センター庵原分庁舎に拠点を設置した。

平成 19 年度から、NPO 法人等の研究者と意見交換会を開始し、自然系博物館のあり方や持つべき機能などについて議論を重ねてきた。

平成 20 年度に、名称を「静岡県自然学習資料センター」とし、静岡大学の博物館実習の受入れを開始した。（平成 24 年度からは東海大学の受入れを開始）

平成 21 年度には、整理が進んだ標本を、県民に普及、情報発信するため、ホームページで公表すると共に、平成 22 年度からは、出前による博物館を開催し、来場者は、年間約 27 万人（平成 24 年度）に上っている。

平成 23 年度には、現在、拠点がある旧中部健康福祉センター庵原分庁舎の老朽化、狭隘化による課題を解決するため、統合により閉校となる静岡南高校の校舎に移転することを決定した。

平成 24 年度には、将来の博物館への移行を見据え、静岡南高校移転後のセンターの充実すべき機能と基本的な施設改修のあり方を検討するため、「静岡県自然学習資料センター整備方針検討委員会」（委員長：熊野善介静岡大学教授）を設置し、平成 25 年 3 月に、その方針書を取りまとめた。

これに基づき、平成 25 年度に施設改修の基本設計を実施し、年度後半に改修工事に着手、平成 26 年夏の竣工、移転を目指している。

（４）“ふじのくに” にふさわしい新たな博物館の検討（平成 25 年度～）

平成 25 年度からは、移転後に目指す県立初となる登録博物館の設置に向け、その性格や特徴、具体的な機能などを検討する「ふじのくに自然系博物館基本構想検討委員会」（委員長：安田喜憲 静岡県補佐官、東北大学大学院教授）を設置し、新たな博物館の基本構想づくりを進めた。

3 社会的背景

(1) 地球環境の変化と生物多様性の危機

古より人類の文明は地球環境に影響を与えてきたが、特に近代の目覚ましい経済発展の一方で、地球温暖化や都市化などの劇的な環境変化が生態系に影響を及ぼし、生物多様性の危機に繋がっている。

未来の子ども達に**美しい地球**を引き継いでいくためには、今日を生きる私達が、豊かな自然と変容する環境を探究し、学術的な分析を踏まえて**地球環境の保全**に繋げていかなければならない。

(2) 地域社会の衰退と未来を拓く取組の必要性

人口減少と少子高齢化の進行、地域経済の疲弊やコミュニティの衰退など、地域社会を取り巻く社会経済環境は、今後益々厳しくなると予想されている。

こうした状況を踏まえ、地方が画一的な都市化と都会の生活文化を模倣し、ミニ東京を目指した“**東京時代**”と決別し、地域を愛する人が集い、人を育て、地方が自立して、それぞれの**特色を活かした新しい地域づくり**を推進していく時代が訪れている。

(3) 地域づくりの基礎となる教育再興への期待

地域づくりは人づくりであり、人の意志が人を集め、人々の営みが求心力となって魅力ある地域となる。人づくりを司る教育は地域づくりの基礎であり、教育再興こそ地域発展の源となる。

科学教育の振興をはじめ、授業力の向上、幼児教育の高度化、高等教育の魅力の向上と拡充など、教育を取り巻く多様な課題を克服し、憧れを集める「**日本一教育県**」を目指すことが、今日の県民が待望する総意となっており、併せて、それは博物館の新たな役割として期待されている。

(4) 博物館に対する社会的要請の変化

豪華な展示で集客を図る地域振興施設として設置された博物館では、厳しい行財政改革の下で、経費節減による運営費圧縮と集客増の相反する命題に悶絶するなど、時代の潮流に翻弄され、今日では、本来の調査研究や県民の生涯学習の拠点としての機能を十分に発揮できない施設もある。

新しい時代の博物館は、施設より活動体としての機能が重視され、明確な活動方針のもと、**適切な人材と組織運営体制の確保**が求められている。

4 本県に求められる博物館像

10年に及ぶNPO法人をはじめとする様々な主体との協働による自然学習資料センターの活動を発展的に継承しながら、世界の宝・富士山の名に恥じない全国に誇れる新しいタイプの博物館

(1) 地域の特徴を活かした魅力づくり

複雑な地形構造に深い海溝と急峻な山岳地帯が迫り、自然美溢れる県土には、多様な動植物が分布しており、こうした本県固有の自然資産は、“ふじのくに”発の調査研究の貴重なフィールドとなるものである。

一方、東日本大震災では、自然の力は人類の文明を遥かに凌駕する存在であることを痛感させられたが、本県は、その地形的特性から、東海地震などの大規模地震や富士山の噴火など、自然災害の可能性が指摘されている。

新たな博物館では、こうした地域の特徴を活かし、“ふじのくに”発の自然等についての調査研究を進めると共に、地域の自然環境に関する情報を地域の人々に知らせ、守り、伝えていくことが、博物館の使命として期待される。

(2) 地域づくりの先導役を担う新たな取組の拠点

本県を取り巻く社会経済環境を鑑みると、世界経済の低迷や円高、東日本大震災の影響で、輸出型産業を主力とする本県経済が深刻な影響を被り、全国に比べ、企業活動や雇用の経済指標で、指数の改善が大きく遅れている。

また、2013年3月末現在の本県の社会移動による人口減少数は全国第3位となり、前述の県内経済低迷による雇用の流出のほか、高等教育機関が相対的に少ないことによる19歳等の若者人口の流出が主な原因となっている。

こうした厳しい社会経済情勢を踏まえ、県勢再興の一助としていくためには、世界に秀でた学問を振興し、学問を究める優れた研究者に学びを求めて人が集い、そこから生まれた情報が新たな付加価値となって、地域の魅力となる、そうした地域づくりの先導役を担う取組を主体的に推進する機関としての新たな博物館の存在が必要となっている。

(3) 後発の博物館ならではの工夫と先進性の確保

本県の博物館は、昭和61年の調査開始以来、約30年を経て開設される全国的には後発となる博物館である。新しい博物館は、10年に及ぶNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークをはじめとする様々な主体との協働による自然学習資料センターの活動をベースとしながら、先例の巧拙に学び、先進的な取組にも積極的に挑戦し続ける全国の新たな博物館の範となる組織と活動が期待されている。

少子高齢化の進展で、公共経営が厳しい舵取りを余儀なくされている中で、少子化による学校教育施設の統廃合や、家庭、地域の教育力低下による学校教育の負担の増大から、空き校舎を活用し、科学教育の振興に資する地道な取組を推進することは、博物館への社会的要請の自然な流れとなっている。

また、東西に広い県土の特性を踏まえ、県民誰もが博物館を身近に感じ、科学リテラシー(科学の教養と知識活用能力)の涵養に繋がる工夫も求められている。

5 新しい博物館の基本理念

(1) 館の名称

ふじのくに地球環境史ミュージアム
【英語表記】 Museum of Natural and Environmental History, Shizuoka

(ア) ふじのくに

霊峰富士を中心に、“ふじのくに”周辺に広がる豊かな自然環境には、人の文明が成せる境界は存在せず、地球全体が繋がって（環）いるように、調査研究など自然を探究する博物館の活動に境界（境）はない。

“ふじのくに”は、地球の中の日本の一つの地域に過ぎないが、この**地域の自然を端緒として、世界的な地球環境を考察**することで、**世界に通じる調査研究を情報発信**し、「ふじのくに」の博物館を創り上げる。

(イ) 地球環境史

“ふじのくに”には、恵まれた自然環境に多様な動植物や希少な種が生息・生育しており、この自然の実態と成り立ちを調査研究するとともに、その証拠となる**自然史資料を収集保管し、次世代に継承**していく必要がある。(Natural History)

一方、人類の文明が地球環境の様々な課題を誘引し、生物多様性の危機に直結していることから、**人と地球上の生態環境との関わりを歴史的に研究**することで、過去から現在を見通し未来のあり方に示唆を与える。(Environmental History)

“ふじのくに”の新しい博物館は、**全国初の「地球環境史」の博物館**として、こうした時代の要請に応えていくとともに、新しい地域づくりの実践の学として体系づけ、教育活動を通じて、有徳の人づくりを推進していく。

(ウ) ミュージアム

博物館は、貴重な資料の収集保管、調査研究、教育普及、展示・情報発信の機能を余すところなく発揮し、学術の振興と自然科学の発展、県民の生涯学習の充実に資するものである。

こうした博物館の存在の意味は、博物館法に意志として謳われ、国際標準となる考え方であることから、**世界に通じる博物館を目指し、「ミュージアム」と称**することとする。

また、本ミュージアムは、博物館の基本機能に忠実である一方、学問領域に捉われない質の高い研究の追究や“ふじのくに”まるごと博物館の実現に向けた教育普及活動など、**新たな役割にも積極的に挑戦する「進化する博物館」**を目指すことで、“ふじのくに”発の新しい博物館文化の創造と発信に取り組んでいく。

(2) 理 念

「“ふじのくに”の地域学の創造と 人・交流・連携が導く知の拠点づくり」

(1) “ふじのくに”固有の自然の探究と自然史資料の保管・継承、活用

県民が地域の自然史への知見を深めることが、美しい地域の自然を未来に継承していくことに繋がることから、“ふじのくに”の現在の自然の実体とその成り立ちを探究するとともに、収集した資料を活用し、研究成果や資料の意義を普及することで、県民の科学リテラシーの涵養とその英知による更なる博物館の知の向上に繋げていく。

“ふじのくに”を代表する博物館を目指して、地域の組織や人材との連携や協働を推進し、自然史等に関する資料等の収集保管や調査研究を進めるとともに、普及活動に必要な資料の充実を図り、地域資産として次世代に継承していく。

(2) 富国有徳の理想郷“ふじのくに”づくりの礎となる自然から環境分野に広がる領域の新たな地域学の創造

地域づくりには、それを基礎づける実践の学が必要であることから、地球の中で“ふじのくに”についての学問を体系的に研究し、学を究める人材の育成と連携の広がりを通じて、世界に発信する地域学を創造する。

本県には、世界遺産富士山や南アルプス、伊豆半島ジオパーク、駿河湾などに、豊かな動植物や特徴的な地質構造などが分布し、我々の命を支え、世界の宝とも言えるものであり、人々に自然への畏敬と科学的な探究心を与えるものである。こうした恵まれた自然分野に関する地域資源を活かし、人と自然、環境に係る優れた研究者が集い、自然史を基本に、環境史に広がる研究領域を新たな地域学として探究していく。

(3) “ふじのくに”の未来を育む「有徳の人づくり」の推進

地域の持続的な発展の礎は、有為な人材育成であることから、幼児から大人までの多様な世代の好奇心と自発的な学びを涵養する教育活動を展開することで、地域を愛し、自然への畏敬の念を育み、地球環境の保全を担う「有徳の人づくり」を推進する。

また、有徳の人づくりは、“ふじのくに”県土の隅々のみならず日本全国いや世界にまで広く浸透し、永く受け継いでいかねなければならない。そのためにも、本博物館は、優秀な研究者や教育者が集う世界に秀でた博物館であり続けるために、専門的な知識と志の高い後継者の育成にも取り組んでいく。

(4) 人と情報の交流、連携が導く「知の拠点づくり」

地域の求心力は、そこに根ざす人の魅力と付加価値の高い情報発信力により育まれることから、**ソフトパワー（人材と活動）重視の新たな博物館**の設置を通じて、情報発信の裏づけとなる**世界最高水準の調査研究**を推進するとともに、県民誰もが自立して学ぶことができる生涯学習の拠点や教育者の科学教育研究の殿堂となる**先駆的な博物館機能の創造**に取り組むことで、**人々の知の循環に繋がる社会の構築**を目指していく。

また、高等教育機関や博物館、社会教育施設が集積する有度山山麓に立地する地理的特性を活かし、多様な研究者や学術、研究機関などとの交流や組織的な連携を進めるとともに、国内外の組織、人材との連携、協働を推進し、資料、人材、情報等の様々な資源が集積して再資源化する“ふじのくに”の**知の拠点**を目指していく。

6 活動の基本方針

○ふじのくに地球環境史ミュージアムは、自然史と環境史を研究領域とする全国初の地球環境史博物館を目指し、調査研究、収集保管、教育普及、展示・情報発信等の博物館機能の充実を図る。

○従前の博物館のように、建物や展示に資源を充当するのではなく、高い専門知識を有する優秀なスタッフによる調査研究活動や教育活動を充実するとともに、NPOや県内大学など、多様な主体との研究協力を重視しながら、県内全域から日本をそして世界を活動空間とする「ソフトパワー重視」の活動を展開する。

(1) 調査研究

- ・博物館の求心力は、優れた調査研究に裏打ちされた学術情報の発信力であり、その源は、頭脳である研究者であることから、**世界最高水準の調査研究に取り組む高い志を持った研究者を確保、育成する。**
- ・**長期的視点に立った安定的な研究環境の実現が図られるよう、県が主体的な役割を担い、積極的な取組を行う。**
- ・本県地域の自然環境を明らかにする調査研究を行い、地域の自然の歴史や環境の変化をきちんと把握する。県内全域の概要を順次調査し、必要に応じてテーマを設定して詳細な調査研究も行う。
- ・研究の端緒は現場に息吹き、課題解決を導く資料は現場で集まることから、本県の自然をはじめ、**積極的なフィールド調査**を展開するとともに、高等教育に失われつつあるこうした地道な活動を、博物館の責務として後継者に伝承していく。
- ・質の高い調査研究を推進するため、**国際的な学術誌等への論文発表や著書などによる一般への普及**を前提に活動を行うとともに、研究の高度化に向けた好循環に繋がるよう、**外部資金の獲得**を目指す。

～想定される具体的な取組～

- ・静岡県に根ざし、地球規模のグローバルな視点で調査研究活動を展開
- ・本県の多彩な動植物等の「自然史」を基本としつつ、グローバルな人と自然、生態環境と人類の歴史との関わりの中から新たな歴史科学の研究領域を構築
- ・年縞等の環境記録媒体や歴史史料の調査研究による、「年縞環境史学」を構築し、自然災害等のメカニズムを解明し予測に繋ぎ、静岡県の未来・日本の未来ひいては地球の未来について社会貢献

- ・研究活動の成果を国際的な学術誌や著書として刊行するとともに、国内外の研究者が集うシンポジウムや学会などにおいて、県民にもわかりやすく伝え、自発的な学びの醸成に努めることで、知の循環に繋がる取組を展開
- ・調査研究活動により、収集した資料の新たな価値を発見し、その価値を高め、展示や教育、情報発信へ反映
- ・NPO法人、市民研究員の資料や研究成果の活用や、国内外の研究者が広く議論、交流、情報発信する機会を創出
- ・行政や企業の委託研究等、自然環境のシンクタンクとして機能の検討。

(2) 収集保管

- ・少子・高齢化や価値観、ライフスタイル(生活習慣)が多様化する社会の中で、自然史資料の保管や研究の後継者となる人材は減少し、貴重な地域資産の滅失・散逸が危惧されていることから、自然史・環境史の実態とそれに関連する歴史と伝統文化の成り立ちを調査研究するとともに、その証拠であり、人類共有の財産である**自然史・環境史資料や、それに関連する資料等を収集保管し、次世代に継承していく。**
- ・博物館の資料収集は、研究職の日々の活動により培われた収集家や研究者等との信頼関係や、公立博物館の一貫した理念に基づく組織への信頼・期待により実現するものであることから、長期的な視点に立った地道な活動を継続し、“ふじのくに”の資料の**集積拠点化**を目指す。

～想定される具体的な取組～

- ・これまで自然学習資料センター等において収集・保管を続けてきた29万点余の多様で貴重な自然史資料の活用
- ・静岡県の自然史、環境史に関連する資料・情報を、その活用を図りつつ、自然史資料の適切な環境で保管し、未来に継承
- ・県内の自然に関する資料について網羅して収集保管する唯一の機関として、適正な収集計画に基づく収集保管活動を展開
- ・自然と関係する古文書、古地図等の文献を含む、多岐にわたる文化芸術資料及び図書を様々な手法により積極的に収集
- ・自然と関係する歴史民俗資料を様々な手法により積極的に収集
- ・調査研究、教育普及、展示・情報発信において幅広く活用するため、収集保管した資料を情報としてデータベース化

(3) 教育普及

- ・ 幼児から大人まで、すべての世代の県民の自然科学への関心を高揚し、リテラシーの涵養に繋げるため、体験型講座など、世代に応じた探究と発見を誘う**サイエンスコミュニケーション**（科学に関する一般市民との対話）の**創造**を通じて、自立して学ぶことができる**生涯学習の拠点づくり**を推進する。
- ・ 地球規模での劇的な環境変化が生態系に影響を及ぼしている今日、本県固有の自然環境について県民が学習、研鑽し、**県民の英知が博物館の新たな知となるような、知の循環型社会の仕組みを構築し、自然環境の保全に繋げていくなど、自然史に係る県内の学習・研究拠点としての中心的役割**を担う。
- ・ 東西に広い静岡県において、多くの県民が博物館活動に接する機会を享受し、博物館による有徳の人づくりを推進するため、**アウトリーチ**（出張による展示や野外での自然学習講座等）の**開催などの教育普及活動を全県で展開**する。特に、子供達の自然への関心の低下や理科離れが叫ばれて久しい今日、幼児への資料の啓示や小学校学齢児への興味の醸成に重点を置く。
- ・ 核家族化、情報化する現代社会で、家庭や地域での教育機能は低下し、教育環境も複雑化する中で、教育者の負担は増加の一途を辿っており、科学教育の振興や授業力の向上に向け、教育者を支援する役割が博物館にも求められていることから、**博学連携を推進する教育者研修会や教材研究、各種相談応対等を通じて、科学教育研究の殿堂**となることを目指していく。

～想定される具体的な取組～

- ・ 静岡県に根ざし、地球規模のグローバルな視点で自然と歴史、伝統文化を将来に継承していく人材を育成
- ・ ユニット化した展示を県内学校に持ち込み、教室をさながら博物館の一室に変容させる「スクール・モバイル・ミュージアム」の取組
- ・ 学校の理科教育素材等を活用した「学校博物館コンテスト」等の開催、優秀作品を博物館で展示するなど、双方向の博学連携の実現
- ・ 中庭、山の散策路など、高校跡地の豊富な自然環境を活かし、環境教育啓発プログラムに活用
- ・ 修士課程・博士課程の学生が講座の一環として域内の小中学校をバスで巡回し、科学実験パフォーマンスを行うオーストラリアでの先進事例（「クエスタコン科学サーカス」）の、“ふじのくに”版の計画・実施
- ・ 博物館研修で受け入れた教員が勤める学校に、博物館の分館機能をもたせるアメリカでの先進事例（“museum in the school”）の検討

(4) 展示・情報発信

- ・先例博物館における固定的で豪華な展示は時が経つにつれ陳腐化する実態を踏まえ、高等学校の校舎の再利用にふさわしい機能的で簡明直截な展示を基本とする一方、自立した学びの醸成に繋がるよう、“見る”展示から“考える”展示への進化を目指す。
- ・博物館は舞台裏である収蔵室、研究室が圧倒的に大きな面積を占め、そこで営まれる地道な資料の調査研究や収集保管事業が博物館の運営を支えている。また、来場者にとって、博物館の展示や講座を理解することと同じ位、博物館の活動を理解することは貴重で興味深い内容となっていることから、類似教室が並存する学校特有の均質と開放感を活かし、収集保管や調査研究の現場を演出するミドルヤード(*)**展示**を展開する。
- ・ミドルヤード展示や情報発信する内容は、世界の最先端の事実をわかりやすく伝えるとともに、来場者の好奇心を促し、自発的な学びを誘発する仕組みの構築等に努める。
- ・県下くまなくアウトリーチを展開するために、教育講座を含めた展示活動を移動可能にシステム化することとし、こうした**モバイルミュージアム**の展開により、静岡県民の自然史や環境史に対する理解を深めるとともに、地震などの災害への対応、さらには自然と共生する新たな未来のライフスタイルの構築などに寄与することを目指していく。

～想定される具体的な取組～

- ・県内の多相な自然環境をグローバルな視点で一覧できる基本的な展示
- ・来館者の関心の高揚と理解の醸成の最大化を図るため、専門的な知識と技術を擁するアートディレクター等の確保に努め、その監修の下に、コミュニケーションメディアとしての情報伝達効果を高めた魅力的な展示の演出を実現
- ・自然科学と先端の工学の出会い（ネイチャーテクノロジー等）を表現する展示
- ・標本や化石等の自然系資料だけでなく、自然との関係を物語る古文書や絵図さらには民俗資料など環境史的分析の手がかりとなる人文系資料の展示
- ・一般的な博物館では入ることができない収蔵庫や、博物館で働く研究員の姿を意図的に見せる「ミドルヤード」の活用
- ・外国からの訪問者に対応するための外国語表記・音声ガイド等の整備
- ・スマートフォン等を使った双方向な展示

* ミドルヤード…公開スペース（フロントヤード）と非公開スペース（バックヤード）の中間領域の概念。

バックヤードである収蔵庫や調査研究等の機能を、一般来場者が見学できるようにした空間など。

(5) 他機関との連携の推進

- ・世界の宝とも言うべき“ふじのくに”の豊かな自然環境を調査研究し、その成果を世界に情報発信していくため、**富士山世界遺産センター**や**伊豆半島ジオパーク**、**南アルプスエコパーク**等との**連携**を深め、協働で事業を推進する。
- ・調査研究機能の高度化や組織の活性化を図るため、県内外の**高等教育機関**や**研究機関**等との**共同研究**や**連携**を推進する。
- ・博物館活動の多様化や組織の活性化を図るため、**他の博物館**との共同展示や収蔵資料の貸借、共同研究、連携等を行うほか、図書館、公民館などの**社会教育施設**などとの**展示・情報発信の連携**を進める。
- ・博物館への来場やアウトリーチの推進を図るため、幼稚園や保育園、小中学校などの**学校教育施設**、児童館などの**社会教育施設**との**連携**を深め、教育普及や出張展示、講座の開催の充実を図る。
- ・博物館の4つの機能を十分に発揮するためには、県立施設の人的資源だけでは充足できないため、**NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク**の理解と協力の下で、収集保管や教育普及、展示・情報発信等で協働を実現するほか、地域の研究者や自然保護団体、市民等との連携による**市民研究員制度**、**客員研究員制度**を構築し、様々な主体との共同研究や多様な活動を推進する。
- ・県下各地域への活動の拡がりを目指すため、地域で活動する研究者や、地域企業、学生等との積極的な協働を促進するとともに、収集保管から教育普及、広報に至る様々な機能の**ボランティア**を募集、育成し、その活動を通じて、博物館活動の輪を広げていく。

～想定される具体的な取組～

- ・県内の高等教育機関（静岡県立大学、静岡文化芸術大学、静岡大学、東海大学、常葉大学等）や市町、博物館等と連携し、共同研究や交流、県内資料のデータベース化等を推進
- ・富士山世界遺産センターや県立大学との組織的連携による研究の高度化等についても検討
- ・環有度山の文教施設等との、様々な形態での連携
- ・博物館友の会（仮称）の組織化、ボランティアの募集と育成
- ・収集保管及びアウトリーチ活動におけるNPOの参画

●ふじのくに地球環境史ミュージアムの基本方針

ふじのくに地球環境史ミュージアム

- 自然史と環境史を研究領域とする全国初の地球環境史博物館
- 調査研究や教育普及などソフトパワー重視の活動を展開

大学教員に匹敵する優れた研究者
(学芸員)の確保、育成

・積極的なフィールド調査の展開
・世界水準の研究の推進

調査研究

貴重な自然史資料を保管
し研究成果と共に次世代
に継承

収集保管

博物館としての人と組織
の信頼が育む資料の集積
拠点化

【環境史】

【自然史】

知の拠点

高校再活用による学び舎
に相応しい機能的で簡明
な展示

展示・情報発信

博物館の舞台裏を演出す
るミドルヤード展示

モバイルミュージアム展開に
よる静岡“まるごと博物館”

教育普及

自立的な自然科学リテラシーを
涵養する生涯学習の拠点づくり

アウトリーチによる
有徳の人づくりの全県展開

教育研修や教材研究を通じた
教育者の科学教育研究の殿堂

連携

・富士山世界遺産センター、伊豆半島ジオパーク、南アルプスエコパーク
等との連携推進（調査研究、展示・情報発信等の協働と人的交流ほか）

- ・高等教育機関、研究機関等との共同研究、交流の推進
- ・博物館、社会教育施設等との展示・情報発信の連携、交流の推進
- ・社会教育施設、幼稚園・保育園、学校教育施設での教育普及、出張展示
- ・NPO法人、自然保護団体、市民研究員等との共同研究や様々な協働
- ・ボランティアの育成・活用を通じた博物館活動の拡充

7 管理運営

(1) 基本方針

研究職（学芸員）、教育職、表現の専門家、収集家など、博物館に従事する多様な人材が、その優れた才能を余すところなく発揮し、「全ては県民のために」を運営の基本理念に掲げ、“県民の県民による県民のための博物館”の実現に向けて、協働で取り組む。

①継続性と発展性を目指す主体的な運営

- ・収集保管や調査研究など、地道で長期にわたる博物館事業の継続性を担保するため、県の主体的で一貫した運営への関与を確保する。
- ・また、県立施設としての安定性が逆効果となり、保守的な組織運営に陥ることがないように、組織の活性化や職員のモチベーションの向上に繋がる組織の連携、職員のキャリアアップに繋がる制度等の検討を進める。

②県民や利用者本位の運営

- ・県民や研究者などの利用者が主体的に参画し、共に活動できるように、意見や要望を運営の改善に反映する。
- ・博物館機能の持続的な発展を図るため、適切な目標設定や第三者による評価制度の導入を図る。

③多様な機関や個人との連携

- ・県立施設としての人的資源には限界があることから、NPO法人「静岡県自然史博物館ネットワーク」との強固な連携を中核として、高等教育機関や研究施設、他の博物館、市民研究員など、多様な団体、個人との連携を進める。
- ・博物館友の会組織の設立や企業等の参画、協賛のほか、地域のボランティアの育成、活用などを進め、博物館の地道な活動が地域に愛され、多くの組織や県民等に支えられる博物館を目指す。

(2) 運営方式

博物館の長期にわたる継続的な活動を確保するため、県直営方式で設置するとともに、組織や人事の活性化に繋げていくため、独立行政法人等の新たな組織形態や大学との連携のあり方などについて、研究を進める。

(3) 運営体制

①組織体制

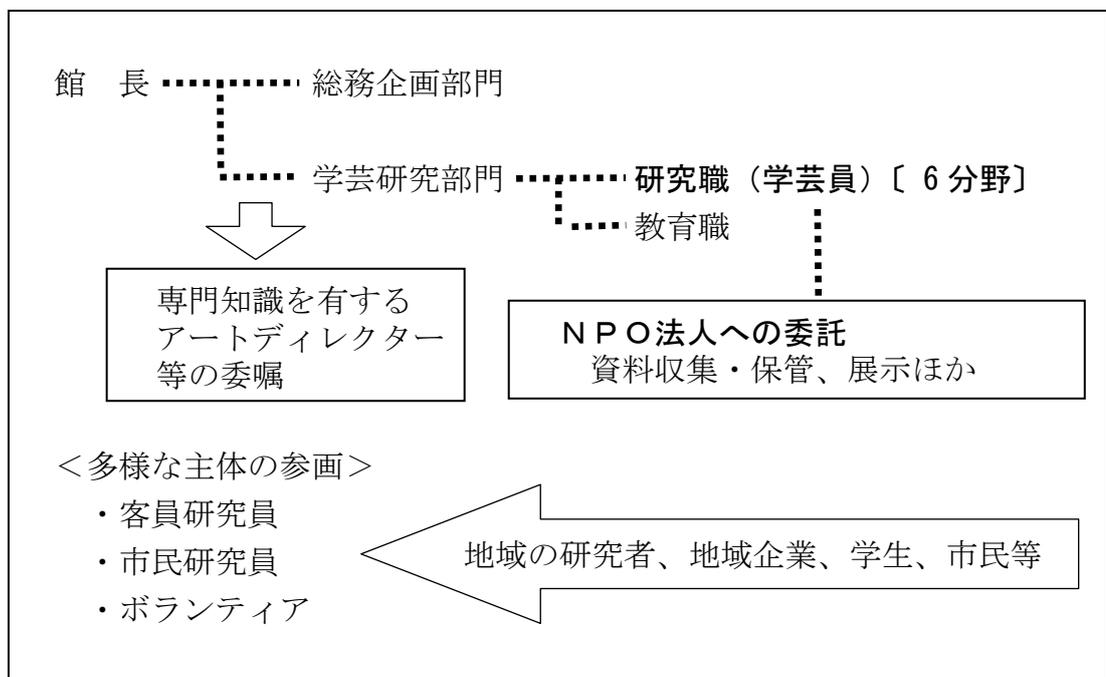
- ・館長の下に、総務企画部門と学芸研究部門を設置する。
- ・総務企画部門は、博物館全体の中期運営方針や単年度計画の策定、各種分野別計画の取り纏めを行うほか、施設の管理運営、人事、予算など博物館の総務部門として、基礎的な業務を行い運営を支える。
また、専門的な調査・研究等を行う学芸研究部門と県民、報道機関など外部とのパイプ役としての役割も担い、学術情報や博物館の広報、渉外等の活動を行う。
- ・学芸研究部門は、研究職（学芸員）を配置し、国際的な視点に立った質の高い調査研究のほか、収集保管、教育普及、展示・情報発信など、博物館の主要機能に係る業務に携わる。
- ・研究領域は、自然史を基本に環境史に広がる分野とし、地震や火山など本県の特性に関する分野を加えるとともに、収集する自然史資料を活用しつつ、過去、現在、未来に繋がる人と動植物の生命の営みを探求する多層的な学問領域からのアプローチを実現する。
- ・配置する研究職の専門分野については、「環境史」、「地質・岩石・地震」、「生命・昆虫」、「生命・脊椎動物」、「生命・植物」、「生命・化石（古生物）」の6分野を基本に、調査研究分野や収集資料の状況等を踏まえた適切な人材確保に努める。

●研究職の専門分野

- *環境史
- *地質・岩石・地震
- *生命・昆虫
- *生命・脊椎動物
- *生命・植物
- *生命・化石（古生物）

- ・魚類など重要な他分野についても、高等教育機関やNPO法人、地域の研究者、学生、市民などとの連携による客員研究員制度や市民研究員制度を構築し、様々な主体との協働により、博物館活動の重層化を図る。
- ・博物館の研究や活動が、わかりやすい展示や情報発信を通じて、多くの県民に理解されるよう、表現に関する専門的な知識を有する人材の確保に努める。萌芽期においては、専門知識を有するアートディレクター等をアドバイザーとして委嘱する。

- ・博物館の特徴である館内外におけるサイエンスコミュニケーションの実現を図るため、博物館教育学に精通した専門的人材の確保を目指すとともに、教育現場の経験と博物館に対する深い造詣を合わせ持つ教育職の確保に努める。
- ・県職員による業務量では、膨大な自然史資料の収集保管をはじめ、県民への教育普及、展示ほかの業務は到底網羅できないことから、これまで自然学習資料センターを支えてきたNPO法人「静岡県自然史博物館ネットワーク」との連携の継続・発展を図り、委託業務等を通じて、協働による博物館運営を目指す。
- ・多くの県民による運営への積極的な参画を実現するため、博物館の多様な業務分野ごとに、県民等のボランティアを育成し、活動への参加を促進する。



②運営評価等

- ・博物館の客観的な評価を行う、外部有識者による博物館運営協議会を設置する。
- ・類似施設で散見される博物館の一側面のみを捉えた定量的な事業評価を改め、多面的な機能を総合的に評価する**新しい評価手法の導入**を検討する。
- ・研究職など職員の実績が、キャリアアップ等に繋がり、**組織が活性化する仕組み**を検討する。

③開館時間、休館日

- ・県民や利用者の利便性に配慮した開館時間及び休館日の設定を検討する。

④利用料金等

- ・ 県民の生涯学習の場にふさわしい利用料金等の設定を検討する。

⑤外部資金の確保

- ・ 調査研究機関としての実績を高め、科学研究費助成事業の獲得を目指すほか、関係団体の助成金や企業、個人からの寄附、博物館友の会など、外部資金や支援体制の確保を推進する。

8 施設整備

(1) 施設改修

- ・ 高校として使われていた建物の面影を残し、低廉で機能的な施設を整備する。
- ・ 校舎の利点である建物面積の広さ、部屋数の多さを活かし、展示室・研究室・収蔵庫等を整備するとともに、将来の発展拡張にも備える。
- ・ 来館者の安全確保のために法令上必要となる防火対策を実施するとともに、誰もが利用しやすい、安全性・快適性に配慮したユニバーサルデザインや多言語標記に配慮した機能的な施設を整備する。
- ・ 収集資料の適切な保管環境を維持する施設を整備する。
- ・ 県産材を積極的に活用し、木のぬくもりを感じることのできるナチュラルで明るい空間を整備する。
- ・ 周辺の豊かな自然環境との調和やその活用に配慮し、ファサード(建築物の正面デザイン)、中庭を活かした魅力的な博物館空間の創造に努める。
- ・ 屋外空間を活用して、ビオトープ(生物の生活空間)や昆虫の集まる樹木の植栽を行うなどの工夫を凝らし、多くの県民が集い、愛される施設づくりに努める。

(2) 展示計画

①旧校舎の特徴を活かした展示整備

- ・ 機能的で更新が容易な展示設計とするとともに、学校としての記憶を留めた新たな学舎の実現を目指す。
- ・ 調査研究の活動成果を発表する場として、プラットホームを整備し、研究者や県民自らが容易に展示することができるようにする。
- ・ 什器等はユニット化し、レイアウト変更が容易な仕様とする。
- ・ 学校特有の均質と開放感を活かし、博物館の舞台裏と来場者の興味を繋ぐミドルヤードを演出する。

- ・外国語表記や音声ガイド導入等、多文化共生社会への対応に努める。

②静岡まるごと博物館を実現するモバイル型展示の実現

- ・教室空間を利用した展示の特性を活かし、小中学校等へ展示をユニットごと移動展開。いつもの学校教室を簡単にミュージアムに変身させる。
- ・中長期的には移動展示車両や展示ブースの開発を検討する。

9 今後のスケジュール(案)

- ・研究職等の職員を採用・配置して、開設準備を進め、27年度に「ふじのくに地球環境史ミュージアム」を開館する。
- ・県民やNPO法人との協働の下、調査研究・収集保管活動を充実し、その成果を展示に随時反映していく。
- ・博物館活動の充実を図り、数年後の博物館法の登録博物館を目指す。

平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度以降
移転	オープン		登録博物館
研究職員の採用			
博物館活動におけるNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークとの協働 (収集保管・教育普及事業委託の継続)			
市民研究員、客員研究員、ボランティア制度等の推進			
博物館機能の充実 (調査研究、収集保管、教育普及、展示・情報発信)			
簡易展示制作			
展示設計	展示制作		
施設改修工事		常設展示、モバイル展示の随時更新	
外構設計	外構工事		

ふじのくに地球環境史ミュージアム基本構想
平成 26 年3月

ふじのくに自然系博物館基本構想検討委員会
(事務局 静岡県企画広報部企画課)

〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9番6号
TEL 054-221-2838 FAX 054-271-5494
E-mail kikaku_kikaku@pref.shizuoka.lg.jp